

---

# 短編集

一嘉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編集

### 【コード】

N5363Y

### 【作者名】

一嘉

### 【あらすじ】

今迄書いた短編やその続き、新しい短編などはこちらに増えて行きます。

テンプレ死因で転生したら逆ハー設定付けられたんですが、ぶっちゃけキモい。

「投稿日」 2011・10/27

「再掲載」 2011・11/15 加筆修正

「設定」 逆ハーにドン引きする主人公と、周りを囲む男達の話。

テンプレ死因で転生したら逆ハー設定付けられたんですが、ぶっちゃけキモい。

ライトノベルによくある設定で、死因は神様のミスだった。

先の見えない不景気と、父親のリストラ、母親のヒステリー、兄はネトゲマニアで引きこもり、妹は女子高生だけと彼氏をとつかえひつかえで『前の彼氏に性病移されちゃった』などと笑って軽く話せるとんでも女子高生。

自分もまた就職活動の真つ最中で、なんとか内定決まった直後に内定出してくれた会社が倒産、振り出しに戻る、などと言う世知辛い世の中を味わっている所だったので、死んだと言われてどこかホツとしてしまったのは、仕方の無い事かも知れない。

出口のない迷路をずっと彷徨い続けていたみたいに不安で孤独で、だけど家族も友人も皆自分の事で精一杯で、愚痴を聞いてくれる？誰か？なんて居なくて、神様と名乗る人物に自分のミスで死んだと言われた時『もう苦しまなくていいんだ』と言う開放感を抱いてしまった。

両親に何も返せずに死んでしまった事は申し訳ないし、悲しいし悔しいけど、神様と一緒に覗いた？下界？では私の遺体が運ばれていく所で、もう戻れないと言う事は十二分にわかった。

いや、そりゃ、下界での死因がトラックに積まれていた10トン近

くのコンビーフに押しつぶされてっつのは、どうかと思うけど。寧ろなんでそんなにコンビーフ乗っけて走ってたの、そのトラック。

コンビーフなら、バラバラッと降って来るから重度の打撲程度で済むんじゃないか、って？ コンビーフがバラバラに詰め込まれてる訳ないでしょ、自販機くらいの大さきの木箱に入ったコンビーフが襲撃して来たんだってば。しかも幾つも。『あ、これ死ぬわ』って普通思うじゃん。実際死んだし。

下界ではトラック運転手の過失って事で、遺族への保障や入っていた保険が入るだろうから、暫く家族は生きていけると思う。お父さん、再就職頑張ってる。お母さん、ヒステリックに叫ばず、もうちょっと落ち着き持って。兄さん、部屋から出て来いや。妹、どうかで節操を購入して来なさい。

と言う事で、私・岡里 詩織は、神様のミスによって死亡し、神様の力によって別の世界に参ります。回復魔法・防御魔法・魔法能力共に最高ランクと言うチートを持って！ では、グッド・ラック！

そんな風に地球の家族に別れを告げたのは、いつの話だったでしょう。もう、5年前？ いえいえ、たったの5カ月前。神様の力によって異世界にて生まれ変わった私は、治療師としてある世界に移動しました。

その世界にて違和感のないように、髪は金に近い茶髪で、瞳は金色、髪の色に合わせて顔立ちも若干変わりましたが、元々の顔をちよつと濃くしているだけなので、強い違和感はありません。

魔力の使い方も、魔法の使い方もチートの一環として、頭に叩き込まれています。旅を出来る程度の体力をオマケしてくれたのは、神グツジョブ！ としか言いようがありません。

治療師を選んだ理由は、ただ一つ。魔物と戦う？ 馬鹿言うでねえ、地球でも平和な国日本に生まれてオラがそげな事出来る訳なかつペよ！ と言う事です。何故訛ったのか、それはなんとなく、です。

そもそも美術部の幽霊部員である自分が、ゲームの世界よろしく剣を持って敵と戦えるスペックがあると？ え？ チートで貰え？ 馬鹿言わないで下さい、何が嬉しくて眼前スプラッタを体験したいと言うのですか。自分の遺体見ても、吐きそうだったのに！

まあ、そんな感じで目の前で血みどろ劇を見たくなくて、敵から比較的距離の遠い所に居ても大丈夫そうな治療師を選んだのです。自分の身は自分で守る事も忘れておらず、防御魔法も付属で付けて貰って。

でも、こんなのは望んでません。神様、あの時私の前に現れた、ボデイコンな神様、セックスアピール度がカンストした神様、胸の谷間に小銃を隠せそうな神様、唇が厚ぼつたくてキスをねだっているように見える神様……！

「シオリ、疲れていないか？ 疲れたら直ぐに私に言うんだ。休憩を取るからな」

テンプレ的な金髪碧眼美形の剣士が私を気遣います。こちらの世界に訪れた時に、迷子になった私を最初に保護してくれた人です。王国の騎士団団長を務めていました。

ですが、保護された後、ギルドに登録・治療師として旅をすると決めた私を心配し騎士団を辞め、この世界の物見遊山の旅に同行して来ました。簡単に辞められる筈のない重い立場を捨ててまでの気遣い、立場だけでなく気持ちも重い、重いです……！

何より、『大丈夫か？』と気遣ってくれるのは有り難いですが、何故私の下唇を指でなぞりながら聞くのでしょうか？ 時折、優しい瞳に獰猛な肉食獣の雄が見え隠れします、怖いです。

「シオリ、あんまりオレから離れるなよ！」

そう言っつて私の腕を取り、金髪碧眼美形剣士から離してくれたのは、赤毛ハチマキがトレードマークの拳闘士です。こちらも美形ですが金髪碧眼美形 長いので、金髪剣士にします。

金髪剣士とはちょっとタイプの違う美形です。あつちが静ならこっちは動、と言っ感じの美形……っつて言えばわかりますかね？ 金髪剣士保護された後、宿の食堂で酔っ払いに絡まれた私を助けてくれました。

その後も私が心配だと一緒に行動してくれるようになったのですが、『一緒に入ろうぜー!』と入浴中に押しかけて来たり、『一緒に寝ようぜー!』とベッドに入り込んで来たり、突然の行動に驚きを隠せません(無邪気でもやっていい事と悪い事あんだろ)

若い男女と一緒に風呂には入りません、恋人同士でもない限りは。若い男女が一つのベッドで眠る事はありません、恋人同士でない限りは。それを言うと、『今はそうかもしれないけど、今後どうなるかわからないだろ?』と笑顔で言われるのですが、私の気持ち、ガン無視です。スルーです。

「好い加減にしたまえ。シオリが困っているだろう。大体、君達は安易に女性の体に触れすぎる」

そう言いつつ拳闘士が私を掴む腕にチョップをしてくれたのは、魔法使いの青年です。長い銀髪で切れ長の目、銀縁の眼鏡を掛けた彼は、今にも?再結合?したがりそうな顔立ちですが、残念ながら私は貴方のお母さんの細胞は持ってません。そんな彼も、私の腰をがっちりホールドしている辺り、安易に触れすぎと言えるでしょう。

彼はギルドに登録しに行った際に出会った人で、同じ魔法使いとして少し話しをしていたのですが、いつの間にか知らない間に同行が決まっていたと言うか、ナチュラルに傍に居たと言うか、メンバーに組み込まれていました。

ギルドレベルも高く、駆使する魔法は主に氷を使うのですが、時折剣士と拳闘士も狙っているように見えます。彼等が避けたり魔法を弾いたりすると、『チツ、しぶとい奴らだな』と呟くのですが、彼



等を殺す気ですか……？

「ああ、シオリ。これを飲んで下さい、この近くで取れた果実の絞り汁です。疲れが取れますよ」

笑顔で水筒を差し出してくれたのは、黒髪碧眼の弓士です。勿論美形。旅に出始めた頃、訪れた村にて出会い、それから旅に同行してくれます。このメンバーの中では一番良い人で、常に笑顔を絶やさず、皆に気配りしてくれます。 普段なら。

戦いになると人相が変わり、一切の感情を削ぎ落とし、無表情で言葉少なくなつて、冷たい瞳で獲物を見据えて弓を引く姿は、まさしく最強の狩人と言つた所でしょうか。

時折、間違つて（ですよね？）私以外の仲間にも、弓を向けちゃう事もあるようですが、戦いの後で『申し訳ありません、狙いがズレてしまいました』と頭を下げています。……間違つて、ですよね？

「まだ次の街までは遠いから、ここらで休憩でも取るかあ？」

そう皆に言つたのは、槍使いで青い髪で翠の瞳の美形です。弓士の彼が合流した後、次の街に向かつている道中の戦闘で出会いました。

明るく、空気を読んで会話をするムードメーカーな所があるのですが、時折お尻を触るなどのセクハラかまして来ます。その度に仲間内での戦闘が始まるので旅が遅れるのですが……好い加減、学習し

て欲しく思います（待たされる私の身にもなれ）

女好きっぽい感じはするのですが、あくまでもそんな感じだけで、実際は全くそんな人ではありません。時折、『昔は女遊びが激しかったけど、今は本気になった女が居る。その人以外は要らねえんだ』と言って見つめられました。

以上で私の旅のメンバーの紹介を終わりますが、彼等、皆、私をとっても大切にしてくれます。ええ、本当にとても。優しくされすぎて、ぶつちやけキモいです。

なんでつて言われると、これ、恐らく……チートの付属である、逆ハー補正です。逆ハーレム。女の子なら、1度でも夢見た事があるでしょう。

自分を好きだと言う、男の人達（イケメンに限る）優しい言葉で自分を励まし、体を張って守ってくれる、だけど見返り期待・強要したりなどしない男の人達（イケメンに限る）

……現実でそれが起きると、ぶつちやけドン引きしますよ？ 夢だから良いんですよ、逆ハーなんて。実際自分に来られてみなさい、まず疑いませんか？ プラカード持って『ドツキリ大成功』っていつ出て来るかと。

そもそも自分の魅力なんて神様から貰ったチート能力だけなのに、どこに惚れてるんですかね、この男等。だって、当初なんて金の使い方わからない、ギルドの登録の仕方わからない、って言うか、文字も読めないし書けない（勉強して書けるようになりましたが、知識としてあったのは魔法の使い方云々のみでした）

そんな女を見て『そうか。知らないなんて可愛いな』とか言う言葉、出て来ます！？ 文化として就学率は少ないかも知れないですが、知らない事が可愛いとか、意味不明過ぎる……！ 勉強教えて貰った時も、腰に手を回されて、ちよつと貞操の危機を感じましたけどね！？

神様、能力チートは嬉しいですし、貴方のミスで死んだとは言え、死んだ事を放置せず、生き返らせて下さった事はありがたいのですが、オマケか何かで付けて下さった？ 逆ハ？ 設定、心の底から必要ないです、直ぐに外して頂きたい。じゃないと……

「シオリ、今日は私と一緒に寝ようか」

「駄目ー！ オレと一緒に寝るんだよな！」

「馬鹿を言うな、自分とに決まってるだろっ」

「僕と一緒にどうですか？」

「俺様に決まってるよな？ シ・オ・リ・ちゃん」

いつか、この5人のうちの誰かに喰われそうです。切実をお願いします、神様……！

「馬鹿ねえ、折角群がって来てくれるんだから、手当たり次第食べちゃえばいいのに……」

死んだ人物が女性だったので特典として逆ハーレム要素を付け足してあげた所、予想に反してドン引きした彼女に興味を持ち、日本とは違う下界の様子を見て楽しんでいる色気ムンムンな神は、周りに従えた男を見、「キミたちも、そう思うでしょう？」と問えば、皆はうつすらと微笑みながら『ええ、私の女神』と声を揃えて返事をした。

テンプレ死因で転生したら逆ハー設定付けられたんですが、ぶっちゃけキモい。

ハーレム・逆ハーレムを傍観する話はあるけども、自分に設定が付いてドン引きする話ってあんまりないなあ、と思って書いてみました。

## 金髪碧眼美形剣士が現れた！

私の名は、ヴィクター・ファイランダー・セービン。年は26歳。若輩者ながらも、バロックレイド王国の騎士団長を勤めさせて頂いていた。

私が運命に出会ったのは、ほんの数カ月前の話。久し振りに取れた休日だが、国の裏手にある森にて何か異変があったと言う噂話を街で聞き、休日ながら1人で調べに向かった。

本来ならば騎士団の下っ端に任せればいい仕事だが、上に行くに連れて外での仕事は激減。たまに外周りをしたいと言っても、騎士団長の手を煩わせるような仕事ではありませんと、仕事を奪われてしまふ。

なので気分転換も兼ねて、個人的に調査していた。調査と言っても、城の裏手の森は誰にでも入る事が許されている森なので、ギルドの人間も噂を聞いてここに訪れているだろう。

噂で聞いた所、この辺りの魔力が時折強まっている、との事だった。魔力が強まるのは、誰かが魔法を使った時のみ。術者が魔力を取り込んで発する物なのだが、なんでも、術者が居ないにも関わらず魔力が強まっていたと言う。

魔力が感じられる度、ギルドの魔術師が訪れて調査したらしいが術

者の気配はなく、なんらかの影響で大地から魔力が流れているのではないか、と言う仮説が出された物の、原因が突き止められていない。

数時間程森を歩き回っても特に異変はなく、少しのつまらなさを感じつつ街へ戻ろうとした時、私の人生を大きく変える人物と出会う。久々の休日を森で過ごす事を選んだ私を褒め称えたい程に、大切な出合い。

「いったあ……」

自分の少し後ろから聞こえて来た声。王国騎士団長ともある者が、こんな近くの気配に気付かないなんて、なんたる不覚だ、と剣の柄に手を掛けてすぐさま後ろを振り返った時、私は天使を見た。

サラリと揺れた、金に近い茶色の髪。転んだのだろう、膝に付いた土を落として上げた顔は、どことなく幼さが残っている。前方で剣の柄に手を伸ばし、警戒している私の姿を見つけて丸くした瞳も金ぶつくりと愛らしい唇は、何か言葉を発そうと薄く開かれたが、直ぐに閉じてしまう。

閉じた唇を見、私の唇を重ねて舌で彼女の口内を蹂躪したい、と言う願望が生まれる。しかし直ぐに『こんな時に何を考えている』と自分を叱咤し、驚いている彼女を警戒しつつ声を掛けた。

「こんな所で、何をしているんだ？」

「あ、あの、ま……迷って……」

「迷った？」

「町、に行きたかったんです、けど……道が、わからなくなってしまつて」

耳に届いた声は穏やかな音。川のせせらぎのように、朝聞こえる小鳥の歌のように、心を癒すかのような心地良い声。少し惑いが含まれているのは、道に迷った故の不安からなのだろう。

町に向かうのだったら案内する、私もこれから向かうと告げると、安堵したように笑みを浮かべて礼を言う。この瞬間、私の心は彼女へと一直線に向かっていた。何故今迄彼女と言う存在を知らなかったのか、不思議な程に。

胸が高鳴り、顔に熱が集まる。不思議そうに首を傾げる彼女をなんとか誤魔化し、自己紹介をしつつ共に町に向かう。ちらりと顔を盗み見すれば、白い肌と長い睫が視界に入り、ますます胸が高鳴った。

「シ、シオリと言ったね。町には、何をしに？」

「あ、えっと、ギルドに登録したくて、町に向かっています……！」

「ギルドに？ そんな細腕で魔物と戦うのか？」

「私は、治癒師なので、どちらかと言うと後方支援と言う物でしょうか……。魔物と戦うのは、流石に怖いので……」

魔物と戦うのが怖いのに、後方支援としてギルドに登録する？ 歩みを止め、彼女の姿をまじまじと見てみる。細い腕に、白い肌。あまり外を出歩く方ではなかったのだろう。治癒師の力を上げる為の杖を持っている手も、町娘達より綺麗で、鞞一つない。指も細くて、



まるで城に居る姫君や貴族の娘達のようにだ。

「治療師としてなら、ギルドに登録するよりも城や町のお抱え治療師の方がいいのではないか？」

「あ、あの、私……旅をしてみたいんです。世界を見てみたいくて……」

シオリの答え方はしどろもどろだが、返答に怪しさよりも先に感じたのは、まるで行き成り外に放り出された子供のような受け答えのようだと言う事。彼女は今迄、碌に世間と関わっていないのではな  
いか、と言う騎士……と言うより剣士としての直感。

それとなく尋ねてみると、彼女は驚いて狼狽し、その後で私の勘が正しいかったと肯定してくれる。なんでも、平穏な世界で暮らしていたのだが、突然外に放り出されて、生きていく事になったそうだ。

あまり詳しく話してはくれなかったが、治療師としての力があるの  
で、取り敢えず話で聞いたギルドに登録し、見分を広げる為に世界を見て回ろうと考えたらしい。

こんな細腕で、治療師としての能力がどれくらいあるのかわからな  
いが、大丈夫なのだろうか。ギルドの登録者は確かに強い人間も居  
るが、荒くれも多いのが問題だ。力で彼女を屈服させて使い捨てに  
したり、性犯罪に走る者も。

私はそれを考えてから、今の？自分の状況を確認する。騎士団長の  
立場として、私はそんなに重要だろうか、と。現在戦争の危険性も  
なく、魔物が出て来るとギルドが動いてくれる。書類の仕事のみで、

ほとんどの指示が副騎士団長がやっていた。

そもそも、私は没落貴族から、なんとか騎士団長にまで上り詰めた。副騎士団長は、私と違って貴族の中でも王の憶えが目出度い貴族の家の生まれ。副騎士団長は私こそが騎士団長に相応しいと言っているが、貴族の連中は私よりも副騎士団長を騎士団長として置きたいのはうすうすわかっている。

頭の隅でそれを考えながら、シオリと他愛ない話をしつつ町に到着し、ギルドに案内する。ギルドに着いて登録に関して一緒に説明を受けたのだが、驚いた事に彼女は字の読み書きが出来なかった。なんでも、自分の所で使っている文字と違うのだそうだった。

困り、慌てている彼女を見て思わず『可愛いな』と呟くと、奇妙な物を見るような顔をされてしまった。失礼な発言だっただろうか、と謝罪してから、ギルド登録所の文字を書いてやる事に。書き終わった後で、礼を言ってくれたのだが、その笑顔にも心を鷲掴みにされた。

「シオリ、頼みがあるんだ。1週間程、この町に留まってくれないか？」

「え？ え、えつと、予定は特に決めてませんので、大丈夫だとは思いますが……何かありましたか？」

「君は治癒師だから、前で戦う者が必要だろう？ 是非、私と共に旅をしてくれ。ああ、これでも王国の騎士だから、そこそ腕は立つよ」

「ええええっ！？ いいんですか！？ ご迷惑じゃ！？」

「いや、君と一緒に世界を見てみたくなった。ただ、仕事を片付けるのに、1週間程時間を貰いたいんだ。その間の宿代は勿論私が出

すよ。いいかな？」

困って、慌てて、本当にいいのだろうか、と言う顔をしているシオリに、『私が君と旅をしてみたいと思ったんだ』と頼み込めば、小さく苦笑した後で宜しくお願いします、と手を差し出された。握手を求めているのだろう。

小さな手を握り返し、私は笑顔で『これから宜しく』と告げて、彼女を宿に連れて行って1週間分の宿代を払い、彼女と別れて城に向かう。騎士団団長を、副騎士団長に譲る為の手続きを行う為に。

かくして、私、ヴィクター、フィランダー、セーピンはシオリと旅をする為にバロックレイド王国騎士団団長を辞し、1人の冒険者として剣を奮う事となった。

**金髪碧眼美形剣士が現れた！（後書き）**

王国騎士団団長と言う立場を考えない行動に関しては、スルーの方向でお願いします（そこまでリアリティを突き詰めた話ではないので／笑）

この時点では、まだシオリ、逆ハーに気付いてません。  
良い人だなあ、程度のレベルだと思われれます。

徐々に増えて、気付くんでしょうねえ……。

ちなみにヴィクターには？にこぽ？が発動しました。

彼女はこれを後に、？就活の弊害愛想笑い？と名付けるとか、名付けないとか……。

目覚めれば、魔王の息子（前書き）

「投稿日」 2011・11/02

「再掲載」 2011・11/15 加筆修正

「設定」 転生したら、魔王の次男。

## 目覚めれば、魔王の息子

薄暗い城内。風に揺らめく蝋燭の灯りを頼りに、俺はある人の部屋に向かっている。自分の部屋とは反対側の棟にある部屋に。通り過ぎる衛兵が驚きの眼差しを向ける中、やっと到着した彼の人の部屋前で立ち止まると、ドアをノック。4回ノックなのは、互いの立場故の事。

「……誰だ」

「兄、俺。話があるから、入っていいか？」

部屋の中で呟くように尋ねて来た声でも聞こえるのは、俺が、俺達が魔族である所為だ。例え暴風雨の中で誰かがすかしっ屁をしたとしても聞こえる程の聴力を持っている。……あまり有り難くない能力だ。

ついでに言うと、態々誰だと聞かなくても気配で俺だと兄はわかっているの筈。何故か、と問われれば、それも？魔族だから？で済む理由。しかし態々誰かを確認したのは、一応の確認だろう。

暫くの間の後、入室の許可が下りたので扉を開く。ちらりと周りを確認すれば、兄の部屋から離れて立っている衛兵が慌てたような顔を見せていた。にっこり笑って手を振ってやると、ますます慌てて

いる。

部屋に入ると、扉を閉めて背中を扉に預けた。外開きの扉なので、誰かが開けたらそのまま倒れるが、父、もしくは母以外の者が入室を許可する前に扉を開けると物理的に首が飛ぶので、そんなチャレンジャーは居ない。

兄は部屋に入って来た俺を振り返る事なく、勉強に勤しんでいる。きつと、魔王になる為に必要な知識を叩き込んでいるのだろう、毎日、毎晩。そつちの勉強には全く手を付けていない俺から見ると『まあ、よくやりますねー』と言った所だ。

「何の用だ。……いや、貴様が言わずともわかっている」

何も言わなくてもわかっていると、兄は俺の事をわかったように言うが、はつきり言って全くわかっていない。言葉の後に、少しの殺気が表れたのがその証拠だ。きつと兄は、俺が宣戦布告をしに来たと思っっている。

生まれてから、16年間。同じ親から生まれ、同じ城ですつと共に暮らして来たのに、双方が？第一位王位継承権？を持っている為に親しくはなれず、ずつと敵視されて来た。俺が、歴代の魔族や魔王よりも遥かに高い魔力を持っていた為に。

だけど、それも今晚で終わり。俺はその為に護衛も何も連れず、この部屋に来たのだから。

「そつか。じゃあ、話は早い。父と母と皆の事、宜しく！ 一応、1年に1回は手紙書く予定だから。んじゃ！」

「……何？」

「何って、王位継承権を放棄して、旅に出るんだってば」

「貴様、それはどう言う事だ！」

「いや、だって何も言わなくてもわかってるって言うから……」

何？ の辺りでやっと振り向いた兄。久し振りに見た顔は、困惑に満ちている。仕舞いには怒り出した兄に対し、自分がわかるって言うから説明省いたんだけど？ と小首を傾げて言っつてやれば、彼はぐっと口籠った。

自分と同じ黒髪で、赤い瞳に尖った耳。この3つは魔族である証。黒髪で青い瞳ならばエルフにも居るが、赤は魔族の象徴。顔立ちは兄が父に似ていて、俺は母に似ている。どっちも美形なので俺や兄も必然的美形になるが、兄は知性的な美形と言えるだろう。まあ男の美形に興味はないから、どうでも良いが。

「兄は俺も魔王の座を狙ってると思っただけだ、それ、すげえ勘違いだから。俺、魔力高いだけで、魔王としての素質ないし。そもそも魔王になりたいと思っただ事ないし」

「馬鹿な事を……貴様、魔族としての誇りを失ったか！」

「その誇りって、俺の誇りじゃないもん。先祖の魔族が積み上げて来たモノであって、俺自身が作り上げて来たもんじゃないから、吹けば飛ぶようなモンだぜ？ 魔族に生まれた事で、誇りを持つ訳じゃねえし。そんな俺が魔王になって、魔族引つ張ってとか無理。

超無理」



魔王として父の後を継ごうとしている兄が居るなら、俺は別に必要ない。そもそも魔王になるつもりもない。周りが囃し立ててるだけ。魔王は兄がなればいい。兄ならきつと、立派な魔王になれる。

そう説明すれば、兄は複雑な表情で下を向いていた。これでもまだ信じられないのかと思い、先程父に継承権放棄の書類を渡して宣言して来たと言えば、驚きに目を丸くし、口をポカンと空けている。ちょ、美形なのに間抜けな顔だから、兄！

「父も母も了解してくれたから」

「何！？ 父上も、母上もだと！？」

「や、だって、2人共、俺が魔王になるつもりないの知ってたし」

愕然、と言った顔の兄に畳み掛けるように、これから自分は地階（魔族が住むのが魔界・人間や亜人達が住むのが地界・神や天使達が住むのが天界）に行つてギルドに登録し、旅をするんだーとwktkしながら予定を話すと、魔族が受け入れて貰える訳ないだろう、と否定の言葉を頂いた。

俺はふふんと笑つてから、魔力を使って瞳に細工をする。赤い瞳を青色にしたのだ。ちなみにこれは赤色の上から、青い色を被せている。言わば、魔力で作ったカラコンだ。

「って事で、後は宜しく！」

「お、おい、待っ」

兄の言葉を聞く前に部屋を出て、向かうのは窓。突然出て来た俺に驚いている衛兵に『じゃーなー!』と声を掛けてから窓を開き、付けていたマント（長い奴じゃなくて、短い奴な）をはためかせて暗い空へと飛び出す。目指すのは、地界。

16年間過ごした城を飛び出、新たな世界を求める俺。数秒後、背後から閉めた筈の扉が叩きつけるように開く音がし、部屋から飛び出して来た兄は窓から俺の背を見て声を掛ける。発しているのは、俺の名前。

「待て、ラクス！ ラクレイシス〓フォトン〓ベルサミン〓アピレボル〓フェリオット〓オマ〓エノカ〓ア〓チャンデ〓ベソ〓ピエー  
ル〓ポムポム〓アバラオレタ〓ガシエツト〓バルサミコス〓バツク  
ライト〓チュウ〓シャキン〓シダ〓ベルガモツト!!」

……いつも思ってたけど、俺の名前って、長すぎね？

「ああ、お待ちしておりました、ラクス様。既に旅立ちの準備は整っております」

「サンキュー、クロード」

「勿体無いお言葉に御座います」

瞳の色を変え、訪れた地界。森の中の開けた場所で待っていたのは、俺の執事兼護衛であるクロード。黒髪で、本来なら赤い瞳をしているが今は緑色の瞳を持ち、剣を装備している。

王位継承権を放棄し、魔族である事も捨てた俺と共に来たいと懇願、断られたらいつそ死ぬと脅された日には、断る事など出来ないだろ？俺としても、1人旅より2人の方が嬉しいし。

クロードが持つて来てくれた服に着替えて杖を持ち、長い黒髪を緩い三つ編みにして貰う。その間にこの辺りにある村や町の話を聞きながら、最初の目的地を決定。俺が魔術師、クロードが剣士として旅をする事に。

目的地はまず近隣にある町へと決めた。俺とクロードは森を出て、その町へと向かう。魔族の俺はもう居ない、ここに居るのは地球に生まれて地球で死に、魔王の息子として生まれて人として旅立った、ラクス＝ベルガモットだけ。

「よつし、行くか」

「はい、ラクス様」

恭しく一礼したクロードに頷き、俺達は歩き出す。冒険者としての、始まりの1歩を……。



目覚めれば、魔王の息子（後書き）

書きたかったのは、兄が名前を呼んだシーン。お前、よくそれを噛まずに言えたね！？ って名前を主人公に付けたかったです（笑）

イケメンでハーレムで俺T u e e eですが、中身は女です。(前書き)

「投稿日」

「再掲載」

「設定」テンプレで男に転生した女性の話

トリップした理由の語りで、下品な表現がちらほらあります。そういう表現の苦手な方は、お気をつけ下さい。

イケメンでハーレムで俺T u e e eですが、中身は女です。

「ねえ、ジユン様。町に着いたら、私と一緒に買い物に行きませんか？」

巨乳・垂れ目が売りの治癒士が、上目遣いと小首を傾げると言う業を使って誘惑してくる。

「駄目だよッ！ ジユンは、町に着いたらアタシの武器を見立てに行ってくれるんだからッ！ ね、ジユン！」

ボーイツシュ・妹キャラが売りの盗賊が、腰に手を当てて小さい胸を強調しながら、自分を選ぶように言ってくる。

「ちよつと、この私を抜きに盛り上がらないでくれるウ？ ねえ、ジユン。町に着いたら、直ぐに飲みに行かない？ 飲み比でジユンが勝つたら、私を好きにしていいわ。その代わり、私が買ったらジユンを好きにさせてネ？」

妖艶さと、厚い唇がウリの魔法使いが、腰をくねらせて腕を組み、大人の武器を使って誘惑して来る。

「君達は一体何を言ってるんだ！ ジユン、彼女達の言う事を真に受けては駄目だ。それより、その……町に着いて時間があれば、剣の手合わせを頼めないか？ いや、疲れているならいいんだ！ う

ん、ジユンが付き合ってくれるなら……」  
高潔さと、知的がウリの元騎士が、同じ武器を使っている共通点を利用して誘惑して来る。

「皆、誘ってくれて嬉しいよ。でも今日は、疲れたから宿に着いたら1人で眠りたいな。買い物や武器の見立て、酒や鍛錬には明日付き合おうよ。いいかな？」

私にはこりと笑って4人に言えば、ジユンが疲れてるなら仕方ないね、と皆は引いてくれた。嘘は吐いていない。実際結構歩いたし、結構戦った。食事をして風呂に浸かって、ゆっくりと静かに休みたい。

町に到着し、私達は町の住民に聞きながら宿を目指した。男である私は1人部屋。女は2人1部屋で過ごす。これはどの宿でも同じである時1人1部屋に泊まった晩、皆が私に夜這いを掛けて来て、問題になった。故に、互いを見張る意味で、2人1部屋なのだ。

着いた宿、風呂に入って汗を流してから食事をし、早めに休む事にした私。何人かは夜の街に出かけているようだ。彼女達は外見は良いがとんでもなく強いので、1人で行動しても危険はないだろう。ベッドに入り、天井を見つめながら、私は呟く。

「何故こうなった」

思い起こせば、原因は神様のミスによる死だった。テンプレ、テン



ブレ。それにより異世界で生き返らせてくれる、と言うのもテンプレ。希望を聞かれたので、金髪碧眼長身美形で、剣にも魔術にも長けた人にしてくれと言ったのは、ちょっと普通と違うかもしれない。何故男になったかと言えば、異世界で旅をして生きるなら、毎月のモノがとても厄介である。魔物が居るなら血の匂いに引かれるし、道具も必要になる。異世界で、しかも文化や科学があまり発達していない事を考えると、現代のような生理用品は望めない。

ましてや女だと、旅の途中で性的暴行を加えられる可能性もある。いくら強くても複数に囲まれてしまえば、戦闘経験値皆無である自分が負けるだろう。

美人？ ブス？ どうせ後で殺すなら突っ込める穴が開いてりやいだろ、と言う男だって実際居ないとも言えないのだから。故に、女ではなく男として希望した。

勿論、身長差から生まれる体の違和感、異性になった事による感覚の違い（男として生まれた事への自覚、って奴）を最初から付属して貰う。じゃないと、トイレとか困るだろうから。

神様は希望を飲み、旅に必要な資金や武器や装備も揃えてくれた。顔に関してはフォントモニタージユの形式で自分で作らせてくれたので、鏡を見ればいつも自分好みのイケメンがそこに居る。……まあ、私なんだけども。

恋愛に関して、男を好きになるかも知れないと言う可能性があった為、そこら辺も一緒に操作して貰った。格好いいとは思っても、男に対して恋愛モードが発動しないように。勿論元々中身は女だから、女に対しても恋愛モードなんて発動しないから、そっただけが重要

だった。

よっし、体も（気分的に）馴染んだので、早速異世界に〜 とテンション上げてでギルドに登録して仕事をしつつ旅をしてたら、望んでないのにハーレム展開になってました。

別に、その人だけを特別に思って優しくした訳じゃなく、人として当然のレベルでの優しさを振りまいていたら、どうやらそれがホイホイ材料だったよう。『冒険者は粗暴な人が多いのに、ジューンは素敵ね』と言う感じでハーレムになっていました。

一緒に旅をしてるのは4人だけど、行く町、行った町全てでフラグを立てている気がする。立ち寄った城の女王（まだ若かった）に、『是非自分と結婚して王配になってくれ、いつそ私は妃で貴方が王に！』と言われた時には、『無理です！』と全力で逃げた。

ある泉で女神に見初められ、そのまま女神の夫として神格化させられそうになった時には『勘弁して下さい！』と本気で逃げた。逃げた後で結局掴まって、夫が駄目なら自分と契約して神の加護を与えさせて、と言われたので了承したら、この世界でのファースト・キスを奪われて……あん時の仲間の4人、女神すらも勢いだったなあ……。

元の世界で、男の夢はハーレムだって言われてたけど、正直夢なんて微塵も見られない。いつ（性的な意味で）喰われるか不安だし、女同士がバチバチ火花飛ばしてるのを見ると、すごい疲れる。しかも渦中の人物だから、逃げるに逃げられないし。

今のはのりくらり躲しているけど、いつ『本命は誰なの！？』と迫られてもおかしくないし、それによって『私達を玩んだのね！』サ

イデー！』と一斉に切りかかって来てもおかしくない。

そもそも、彼女達にそんな態度を見せた事ないのに、勝手に群がって勝手に切れられても困るなあ……。普通に、本当に普通に接しているだけなのに。

だから唯一、自分が静かに休めるのは、宿で1人で居る時。勿論、眠る時は魔法を使って自分以外は部屋に出入り出来ないようにしている。肉食女子、怖い。でも結局目覚めたら、あのオヒメサマ4人に振り回される事になる。

せめて宿で1人の時は、静かな時間を楽しみたい。私は盛大に溜息を吐いて、いつも自分を励ましてから眠る。『明日も頑張り、私』と。

まさかその自分を励ます声を、女性陣がドアにピッタリ耳を付けて聞いているなんて、私は知らない。自分を励ましている言葉を『前向き』だとか『頑張りや』だとか、勘違いされている事も……。

イケメンでハーレムで俺T u e e eですが、中身は女です。（後書き）

女としてトリップするより、男としてトリップした方が、月のモノがなくていいよねー、と思ったので書いてみた話です。

## 復讐の召喚術（前書き）

「投稿日」 2011・11/05

「再掲載」 2011・11/18

「設定」勇者として召喚された少女が、魔王を倒す事を強要されて  
キル話。

## 復讐の召喚術

帰る世界を奪われた、家族を奪われた、孤独を押し付けられた、責任を押し付けられた、命を奪う事を強要された、傷つく事を強要された、世界を救う事を命令された。もう、身も心もボロボロだった。

街に行けば数秒毎にすれ違う子と、なんら変わりはなかった。学校に行つて友達と馬鹿やって楽しんで、雑誌に写るモデルに憧れて、恋人と並んで幸せそうに歩く人達に羨ましさを感じて。平凡で、穏やかで、笑い声が絶えなくて。家に帰れば暖かいご飯が、お風呂が、家族が、ベッドがあった。

父は遅くまで働いて、お給料日にはお小遣いをくれた。母は毎日美味しいご飯を作つて、でも時々失敗して『ごめんね』なんて悪戯っ子のように笑つてた。弟はヤンチャで、顔に傷を作つて帰つて来て、手当てしたら『早く彼氏作つて、彼氏にも手当てしてやれよ』なんて生意気言つて。

でも、一瞬でそれを奪われた。

かび臭い部屋、蠟燭の明かり、白い衣を纏つた人達、偉そうな人。魔王を倒し世界を救う勇者よ。この世界に招かれた時、人並ならぬ力を与えられたらう。勇者よ、魔王を倒して世界に希望を、光を取り戻せ。それが召喚された者の義務であり、責務である。

何それ。なんで自分の関係ない、生きた場所じゃない、守るものもない世界を私が救わなければならぬの？ 家族も、友達も、誰一人として知っている人が居ない世界を救う義務を、何故この世界に關係ない私が負わなければいけないの？

嫌だと叫ぶ声は、罵りの言葉となつて返つて来た。勇者なのに、選ばれた者なのに、世界を救う力があるのに、と。世界を救う力があつても、救いたい世界じゃないなら意味がない。

殺すのが怖いと言えば、呆れた顔をされた。情けない、勇者とあるうものが、魔物の1匹も殺せないなんて。なんの為に与えられた力なのだ、と。私の生きてきた世界を知ろうともせず、押し付けられて、手が血で汚れた。

寂しい、と声を漏らせば、鼻で笑われた。いい年をして寂しいなんて恥ずかしくないのかと。家に帰れば待っている人が居る、近くには友人が居る、共に食事をする相手が居る、冗談を言つて笑い合える人が居る。そんな人達に、この孤独はわからない。

頼れる者は、1人も居ない。抱きしめて『1人じゃないんだよ』と言つてくれる人など誰もいない。与えられた剣を持ち、手に肉刺を作つて、殺して、殺して。時には奪つた命に涙を流し、血の匂いに嘔吐し。

帰りたいと呟いても、帰る場所などない。家族の名前を呼んでも、答えてくれる事などない。耐えて、耐えて、2年の月日を耐えて、やっと辿り着いた魔王の元。

大きな城、道中で幾度も戦い、感じた魔物の気配すらない中を歩き、謁見の間に足を踏み入れると、玉座に座っていたのは威圧感漂う魔

王の姿。黒髪に赤い瞳、尖った耳。しかし整った顔立ちは、見た事もない程美しいもの。

剣を抜き、恐怖と戦いながら1歩ずつ近づけば、数メートル手前で声を掛けられた。お前は何故、そんなに頑張るのだ、と。聞きたくない言葉が、流れていく。

異世界より訪れ、頼れる者も居ない中で1人耐え忍んで来た勇者よ。私を倒して救う程、この世界にはお前にとって価値のあるものか？

お前に義務を押し付けた者達を。お前に殺戮を強要した者達を。お前の孤独を知ろうともしなかった者達を。お前の帰る場所を奪った者達を。

次に聞こえて来たのは、鈍い音。音の先は、落ちた剣。持っていた剣。床に膝を突き、手で顔を覆って泣き叫んだ。殆ど声にならない声をあげ、体を丸めて。

バサリと頭の上から音がして、脇に手を入れて立たされると、暖かいものに包まれた。玉座に座っていた魔王が、自分に近づいて立たせ、抱きしめていた。久し振りの人の温もりに、驚きよりもまず訪れたのは安堵。

「私は見ていた。勇者が召喚されてから、ここに辿り着くまでお前の姿をずっと。泣く姿を、怯える姿を、耐える姿を。そしてそれでも戦う姿を。いずれ私を倒しに来る者への好奇心だったが、苦しんでも立ち上がるうとするお前を見て、決めた。私と共に在れ。私がお前を守るう」



例え魔王の作戦だとしても、騙されていたとしても、傷つき剥き出しになった心に、彼の言葉は温かく染み込ませた。呼んでおきながら、理解しようとせえずに苦しみだけを与え続けた者達よりずっと。

殺されても良い、魔王になら。そう思っただけで、魔王は涙を指で優しく拭いて、唇に温もりを与えてくれる。　　婚姻は成されたと言った。勇者はその日、魔王の妻となった。

魔王の妻になってから、暫くは穏やかに過ごした。隠れていた魔王の部下達は、仲間を屠った勇者の自分にも良くしてくれて、召喚した城の者達よりずっと優しく、暖かかった。

食事も人間と変わらず、いつもは一人で食べていた味気ないご飯も魔王と共に、彼が居ない時には彼の命令で下部と共に食べた。やっと、美味しいと感じるようになった。少しずつ笑えるようになった。妻として共に眠る事はあっても、心の準備が出来ていないとわかってきたのだらう、魔王は無理を強いる事はなく、自分が受け入れられるまで待つてくれた。初めての晩、お前との間に出来る子が楽しみだと、髪を梳きながら未来を語ってくれた。

穏やかな日々、ある程度傷が癒えてから心に現れたのは、怒り。

勝手に呼んでおいて失望した者達。何故、自分があそこまで言われなければならぬ？　あの状況下において、なんの身よりも情報もない自分が、反発して城を出るなどないとわかっていて、利用した者達。許せない、絶対に。同じ苦しみを味あわせてやりたい。

殺気が漏れていたのか、部屋の扉が開き、夫である魔王が入ってきた。どうした、と優しく問う声に、自分の思いをぶちまける。軽蔑

されるかも知れないが、この怒りは抑える事が出来ない。だが魔王は優しく髪を撫でて、だったら同じ状況を味わわせてやればよい、と言った。そして、その方法を教えてくれた。

「僕は、僕はファリストス王国の第一王子だぞ！ 魔王と戦うなど、出来るわけがない！」

「貴方は王子である前に1人の勇者なのです。そもそも、この世界にはファリストスと言う国など存在しないのですよ。貴方の身分はこの世界ではない物とされていますので、勇者として魔王を退治しに行くのです」

「そんな、そんな馬鹿な事を……！」

「私は勇者などではありませんわ！ 元の世界に帰して下さいませ！」

「異世界から召喚された時点で、常人ではない力を得ている筈でしょう？ 貴女は勇者なのです。そして元の世界に帰る方法などありません。いいですか、貴女は魔王を倒す為に存在しているのです」

「っ……！！ お父様、お母様……！！」

「寂しい？ 馬鹿な事をおっしやるな、貴方はもういい年ではありませんか。そんな子供のような事を、勇者ともあるうものが……」

「俺には、この世界に知り合いが1人も居ないんだぞ！ 友人も、家族もそうだ！ お前達が勝手に俺を呼んだから……！」

「勇者よ、戦う為に召喚された貴方に、孤独など感じている暇などないでしょう？ さあ、そんな時間があるなら鍛錬でもして下さい。全く、情けない事だ……」

「くそっ……！」

「命を奪う事が怖い？ 相手は魔物ですよ？」

「魔物でも、戦うのは怖いし、殺すのは嫌です……」

「これから幾多の魔物を殺さなければならぬと言うのに……。いいですか、慣れるまで殺すのです。その手を血で汚しても、貴女は勇者として戦い、殺さなければならぬのです」

「酷い……私、戦った事なんてないのに……！」

一晚の夢。しかし、途方もなく長い夢。私のように本当に召喚された訳ではなく、夢として私がやられた事と同じ事を経験させる。勿論、それは人間達だけ。召喚された勇者に希望を抱いていた者達だけが見る悪夢。魔王に教えられたのは、そんな悪夢を見る魔法。

夢の中で彼等は実体験と同じように過ごし、苦しみ、蔑まれ、苦痛を感じ、悲しみ、嘆く。魔王に出会った時の私のように、救いなど与えず。毎日、毎晩苦しむ事になる。戦いに慣れている軍人達は、一般人よりも少しハードだが。

目覚めた後、彼等は知る。召喚儀式で呼ばれた勇者の孤独を、悲しみを、寂しさを、怒りを。私を感じた気持ち全てを、被害者と言う立場を味わってやっと気付く。同時に、自分達が加害者である事に気付く。気付いた彼等に襲って来るのは、後悔、罪悪感。そして勇者に対する懺悔の時間は死が訪れるまで、永遠に終わらない。

「愛しい妻よ。お前の気持ちは、少しは晴れたかな？」

「少しじゃなくて、十分晴れたよ。有難う」

「礼など必要ない。お前を悲しませた者達を、許してなどおけないさ。さあ、私達もそろそろ眠ろう。夢の中でも愛しているよ」

「うん、私も、夢の中でも愛しているよ」

力強い腕に抱きしめられ、私は眠る。眠った先、夢の中で待っているのは、魔王である夫。起きていても、眠っていても、私は彼と共に時間を過ごす。夢魔の王である、愛する夫と……。

## 復讐の召喚術（後書き）

ちなみに、勇者を知らない・生まれていない・生まれていても物心がついていない・などの人間は除外。

召喚術で呼び出された夢を見せているので、召喚術とはまたちよつと違うかも知れませんが……。

勇者召喚をよしとしていた王族・貴族などは勇者を苦しめた事に気が付きながらも、技術を残した先祖に責任転嫁。

民はこんな悪夢を見せられるのは勇者の所為ではなく、勇者を苦しめた王国だとして反乱を起こし、国家滅亡ルート一直線。

父が勇者になりました(前書き)

「投稿日」 2011・11/05

「再掲載」 2011・11/19

「設定」 一家団欒中に召喚なう

一部、ちよいグロな表現があります。

## 父が勇者になりました

彼等は皆正座し、片手に茶碗を片手に箸を持った状態でポカンと一点を見ていた。見ているのは彼等をぐるりと囲んでいる兵士らしき人々や、神官のような格好をした男達の中、1歩だけ前に出ている代表者らしき女性。

ちなみに彼等が手に持っている茶碗には、白いホカホカご飯と、その中に生卵。醤油をちよつと垂らしてかき混ぜている最中に、気付けば家族全員で移動していたのだ。

一家の全員が食卓から見ず知らずの場所へ一瞬で移動し、何があつたかわからない常態で周りを見渡すと、代表者だろう美しい女性が彼等に声を掛ける。『ようこそお越し下さいました、勇者様』と。若干顔が引きつっていると云うか、困惑に満ちているが。

周りをぐるりと囲んでいる者達は、予想外の数　と言うより、食卓を囲んでいただろう家族が一気に召喚されて、一体誰が勇者なのだと視線で女性に問うも、視線を送られている女性は何も言わない。

円になって座っている彼等を紹介しよう。父親・大地(45)妻・葉子(42)長男・樹(19)次男・桂(17)三男・楓(15)四男・桐(13)の6人家族。見事に男ばかりの一家である。



「って、卓袱台どこ行つたんだよ！ 俺の厚焼き玉子は！？」

「楓、今は厚焼き玉子の心配よりも、まず先にする事があるだろ。取り敢えず、お茶下さい」

「桂、お前冷静に見えて結構混乱してるだろ。そして父さん、何事もなかったかのように卵掛けご飯食べてる場合じゃないだろ。つか、卵掛けご飯に厚焼き玉子って、卵のオンパレードだな……コレステロール値が心配だ」

「樹兄ちゃん、俺、まだ醤油掛けてなかったんだけど……」

「桐君、お醤油だったら私が持つてるわ。でも、私のご飯が消えちゃったわねえ……」

「葉子さん、俺の半分残したから食べな」

「まあ大地さんたら……！」

昔と変わらず優しいのね……。いやいや、愛する葉子さんの為なら空腹も我慢出来るさ。周りの人々の困惑をスルーし、いつもと変わらない食事風景を見せている家族達。

「きつと、あの眼鏡の青年が勇者なのだろう……」

ある男は、長男・樹を見て代表者の女性に問うが、首を振って否定される。

「では、あの悔しがっている少年か？ 厚焼き玉子とは、一体なんだ……？」

ある男は、三男・楓を見て問うが、それも否定。

「では、ポーン神官に茶を強請っている青年か？」  
ある男は、次男の桂を見て問うが、否定。

「ならば、赤黒い液体を卵に入れている少年が……？」  
ある男は、四男の桐を見て問うが、これも否定。

女性ではないだろう。歴代勇者は全員男だった。ならば、まさか……  
全員は顔を見合わせ、残った男である父親を見る。視線を感じ、  
『ん？』と首を傾げる父・大地。

いやいやいや、若い男がこんだけ居るのに、あんな中年が！？と  
皆が思ったのだが、代表者の女性は肯定するように首肯し、『世界の  
意思が選んだ勇者様です』と父親であろう男が勇者である事を認  
める。

「え、父さん勇者なの！？マジで！？すつげえ、俺、勇者の息  
子じゃん！」

「まあ、凄いわ、大地さん！今夜はお赤飯ね！」

「じゃあ、俺、バイト先（スーパー）で鯛を買って来るよ」

「俺は（専門）学校帰りに、飾る花でも買って来る」

「んじゃ、俺は父さんの好物のシュークリーム買って来る」

「なんだあ、皆、嬉しい事を言ってくれるなあ……！よし、父さ  
ん、勇者を頑張っちゃうぞ！」

何、この空気。勝手に仲良し家族を繰り広げる一家に、周りの者達

は微妙な感じになっていた。魔王が村や町を蹂躪し始めて早半年。送った軍人達は食い散らかされた死体になって戻って来て、最後の頼みだと勇者召喚に賭けたのに、とんでもなく平和な一家が来てしまった。

もうこれ世界終わった……。一同がそう思ったのだが、和気藹々としていた家族は、次の瞬間に空気を一変させる。ニコニコと照れ笑いでいた大地は真顔になり、同じく葉子も笑みを消して背筋を正す。息子達は床に茶碗と箸を置き、視線を両親へ。

「さて、息子達よ。俺と葉子さんが昔から言い聞かせていた事を覚えてるか？」

息子達は揃って頷き、それを見て大地もしっかりと頷く。それぞれ、このような事態に備えてやって来た事を忘れず、十二分に力を発揮するように、と言えば、彼等は強い返事の後、頷いた。

「え？ あ、あの、勇者様……？」

「いやあ、久し振り……。それこそ、二十数年振りに別の世界に来て、驚いてしまいましたよー。さて、この国の情勢と倒すべき相手の名前と場所を教えてくださいませんか？ ああ、旅立ちの費用は頂きますが、仲間の用意は結構です。家族でパーティを組みますので。これでも昔、別の世界に迷い込んで、魔王を倒した経験がありますからね……。実は、妻とはそこで出会ったんですよ、はっはっは！」

「あの時の大地さんは、素敵だったわあ……。敵をちぎっては投げ、ちぎっては投げ……。貴方が降らせる血の雨に、うっとりしてしまっただわ」

「いやあ、葉子さんの上級魔法も中々だったよ。敵をエアカッターで切り裂いた後で、トルネードで打ち上げて、降り注ぐ肉片……。思えば、あれを見た時から君に惹かれていたのかな」

「まあ、いやだわ、大地さんったら！」

聞けば中々にグロい話をしているのに、何故こんな幸せそうに話せるのか。顔を引きつらせる一同を尻目に、息子達はそれぞれの武器や使用出来る魔法について話していた。長男は魔法使い、次男は剣士、三男は槍使い、四男は治癒士だそうだ。

「あ、あの、勇者様、それでは魔王を倒して頂けるのですか……？」

「ええ、勿論ですとも。私達夫婦が経験したのだから、息子達もいずれこんな日が来るかも知れないと思っていましたが……まさか家族総出で、しかも私が勇者に選ばれるなんて……。年甲斐もなくはしゃいだりして、申し訳ない。それでは、場所を変えて詳しい話でも聞かせて頂けますか？ その時に、私の家族を紹介致しますよう」

では、ご案内致します。代表の女性に連れられ、一家は茶碗を持つたまま移動する。朝食足りねー、と聞こえた声に、こちらで用意致しますから、と声を掛けつつ。

代表者の女性である、神子のリーレンは、今だ嘗て聞いた事のない勇者と勇者の家族に、一抹の不安を抱えつつ、勇者として世界が選んだのだから大丈夫だろうと、必死に自分に言い聞かせていた。

数カ月後、彼女の不安は外れ、魔王の首を持って世界に平和を導いた一行が戻って来たのだが、母親である葉子の腹が膨れていた事には、誰も突っ込みを入れなかった。

## 父が勇者になりました（後書き）

父親が勇者として召喚されて、家族に褒められ『お父さん、勇者として頑張っちゃうゾ！』って父親を書きたかったんですが、いつの間にか両親がトリップ経験者になっていました（なので息子達も鍛えられていると言っ………笑）

チートだけど、チートじゃなかった(前書き)

「投稿日」 2011・11/06

「再掲載」 2011・11/19

「設定」 転生で妙なチート能力を貰ってしまった女性の話

チートだけど、チートじゃなかった

体が土が付くのも気にせず、のた打ち回る数人の男達。悲鳴に近い声を上げながら、視線は自分達を冷たく見下ろす女性へ向ける。『助けてくれ』『勘弁してくれ』と掠れて聞こえ辛い声で救いを求めるが、彼女は男達を見下ろすだけで何もしない、動かない。

何も考えず、ただもがく男達を見ている彼女は魔法使い。元日本人だが、死ぬ予定ではなかった故に、魔法使いとしてファンタジーな世界に飛ばされた。予定である88歳まで頑張って生きて、と知識と金と魔法と言うチートを貰ったのだが。

「……笑いが止まらなくなる魔法って……」

声に出してしまったのは、無意識。別に自分を襲って来た奴に反撃し、愚かな男達を冷たく見下ろしていた訳ではない。自分が使った魔法に対し、なんだコレ、と思っただけだ。元々あまり表情筋が動かないのが災いし、とんでもなく冷徹に見えているだけである。

貰ったチート魔法、飛んだ先が森、現れた盗賊に情報として自分の中であつた攻撃魔法から一つ選んで使ったのだが、魔法の名前と効果が一致しないので、取り敢えず上から（ゲームのように一覧になっていたので）使ってみたのだが、直後、男達は何もしていないの



に行き成り大声で笑い出した。腹を抱えて。

何もしてないのに大爆笑する男達。人の顔を見て笑い、顔を見合わせて笑い、遂には地面に転がって笑い続けている。それを見る彼女の表情は変わらないが、内心ではドン引きしていた。第三者が見ればシュールな光景だが、残念な事にこの辺りには彼女と彼等以外に人は居ない。

彼女が盗賊を笑わせ始めてから、約5分。呼吸もままならない状態で笑い続けている盗賊達に、折角だからここで魔法を全部使ってみようかな、と魔法を試してみる事にした。

苦しんでいる者を実験台に使う事が非道だ等と言わないであげて欲しい。彼女も必死なのだ、自分の未知なる力を知る為に。それに盗賊なら褒められはしても、誰も怒らない筈、と想着て。

「えーっと、じゃあ、えい！」

やっと腹筋崩壊レベルの笑いから開放された男達だが、今度は体を何かが這いずり回る感覚を味わっている。『ひぎゃああ』と悲鳴を上げる者も居れば、『あふん…』とちよつと吐息混じりの声を上げる者も。

しかし吐息混じりの悲鳴を上げた者も、数秒後には体を這い回る奇妙な感覚に耐え切れず悲鳴を上げている。この魔法、いわば体中を大量のなめくじが這い回るような感覚を味わう魔法。笑った後で力が入らず、体を掻き掻く事も出来ない。

「次は、えい！」

次に使った魔法は、どうやら爪が伸びる魔法のよう。無骨な男達の手爪が、まるで丸まるように長く伸びている。戦い辛いだろうけど、爪は切れば問題ないので、特に強い攻撃性はないと判断した彼女は、再び次の魔法へ。

次の魔法は、毛と言う毛を伸ばす魔法だったようで、盗賊の男達の毛根と言う毛根から、わっさわっさと毛が生えた。『うわ、キモっ』と思わず声に出してしまったのはご愛嬌。

「あ、これ、頭部限定のモノもあるなあ……。ん？ 待てよ……。？  
これで一発稼げるかも……。！」

きつとこの世界にも、頭部の寂しさに悩む人が居る筈！ 彼女は天職とも言えるべき物を見つけ、『使えない魔法だな！』と落ち込んでいた気分を上昇させる。

攻撃魔法と言っても、彼女の攻撃魔法はまるでコントのネタのような物ばかりだったから。ちなみに、彼女はここまでほぼ無表情である。口調は軽いが無表情、中々居ない。

「よっし、気分も良くなったから、町か村でも探そうっと。あ、でも追いかけられたら困るから、もう1度笑いの魔法をかけておこうかな。えい！」

再び森の中に爆笑が響き渡る。再び強く引き攣り始める腹筋に、盗賊達はなす術もない。『じゃあねー』と手を振り、彼等の前を後にする彼女。引きとめようと、手を伸ばすが、口からは笑い声しか出て来ない。

遠ざかる背中はやがて見えなくなり、盗賊達は『こんな死に方ありかよ……』と思いつつ、呼吸困難によりそれぞれ意識を飛ばしていった。気絶すれば魔法は解けるようで、死にはしなかつたものの彼等はその後数日間、腹筋の痛みに悩まされる事になった。

やがて彼女は、有名な魔女となる。

ある国では笑みを忘れた王妃を笑わせ褒美を貰い、ある国では母親の死から立ち直れない王子を救い、ある国では体の感覚が麻痺してしまつた公爵を救つて金銀財宝を貰い、ある国では美しい顔を持つが若ハゲに悩む王の頭部に毛を生やして爵位を貰つた。

その後、彼女は若ハゲだつた王と結婚し、王と共に国民の笑顔を決やさぬ国を築いたと言つ……。

チートだけど、チートじゃなかった（後書き）

某ドラマの中で？ゲラ？と言う魔法がありましたか、どっちかと言  
うと？あくまでラブコメ？で悪魔が使った魔法ばいです。

神が選んだ娘（前書き）

「投稿日」 2011・11/11

「再掲載」 2011・11/19

「設定」 神が選んだ異世界の勇者と、その世界の神子の出会い

## 神が選んだ娘

この世界は、魔王の脅威が訪れる度に異世界より勇者となる人物を呼び、勇者に魔王を倒して貰っていた。呼ばれた方に見れば、『いや、自分達の世界の問題くらい自分達で片付けるよ。どこまで他人任せ？』と思うだろうが、何千年も昔からそれを繰り返して来たので、世界の人々には罪悪感など微塵もない。『だって昔からそうだったし』うん、便利な言い訳だ。

そう言う私は、日本に生まれて日本で死に（病死だった。闘病生活で、何度『何故自分が？』と思っただのは懐かしい話……）気が付いたら、この世界の母親の膝の上に乗って、ご飯を食べていた。年齢にして4歳。転生したと気付いた時、赤子からの羞恥プレイじゃなくて良かったと安堵したのは言うまでもない。

さて、先程の話に戻るが、この世界は魔王を倒す為の勇者を異世界より召喚する。その人物の選択は、この世界の神と異世界の神が人物を選んでくれるのだが、勿論この世界からも勇者を支える？神子？の娘が選ばれる。選ばれた瞬間、勇者が攻撃に特化、神子は守りに特化し、ある意味2人で1人の勇者となる訳だ。

これは『お前の所、こつちの世界の人間に頼り過ぎじゃね？』『んじゃ、こつちからも勇者つばいの出すかなあ』って事で、役割分担をしてこうなったと言われる。それが数百年前の話で、最初に勇者が呼ばれて数代は勇者が両方兼ね備えていたと言われている。

要するに、世界の人々は魔王に関して、異世界の勇者と神子に頼りきりなのだ。勿論、サポートはしてくれ。勇者と神子の一行は道具や装備半額、食事代半額、宿半額、宿がない地域だと村長もしくはそれに該当する立場の家には、必ず勇者が泊まる部屋がある。

サポート万全にするなら、アイテムも宿もタダにしるよ、と言いたい所だが、こつちも生活があるので無理！　と言う事だ。10歳の頃、このシステムを聞いた時に『ケチだな』と思ってしまったのは、私だけだろうか。

話は再び勇者の召喚に戻るのだが、数カ月前に魔王が現れた。何故わかったかと言えば、この世界の神を祭る神殿が魔王が現れたと言う神託を受け取った事により、各国の王が民に向けて発信したのだ。

そしてそれより少し遅れて、勇者の召喚と神による神子の選出が行われた。勇者の召喚は神殿の神官達にて行われるが、神子の選出は当人しかわからないようになっていた。勇者の印は利き手の甲に神の印が入るのだが、神子の印は額に印が入るのだ。

ここまで言えば、なんとなくわかって頂けるだろう。いつも付けていたバンダナ（頭を覆う形ではなく、細く畳んで額に付けていた）を外して顔を洗おうと水面に顔を近づけた時、デコに金色に輝くソレを見つけて、私がどれだけ卒倒しそうになったか。

『今回の神子様は、どんな方なんだろうねえ』『きつと、インフェルの女王様のように美しい方だよ』と近所のオバちゃんが立ち話をしていたが、まさか近所に住む私が神子として選ばれるなんて、思いもしないだろう。私も思わなかった。

なんせ、歴代の神子様は皆美しい人で、勇者と恋仲になって未永く幸せに暮らしたと言う伝説が多々あるのだ。実際、インフェルと言う国の王女は祖母に神子を持っていたが、その美しさは孫である王女に引き継がれていて、世界中の貴族や王族が彼女を妻に、と欲している。

彼女自身はそれを全て跳ね除け、運命の相手を待っているそうだし…要するに、魔王が再び光臨して、自分が神子になるのを夢見ていたのだろう。その儚い夢を木っ端微塵にぶち壊したのは、他でもない私だが。

それに、そもそも……そもそも、だ。

「おい、正気か！？ どう見たって、男じゃないか！」

「うーん、そうなんだけどさあ……。勇者の刻印は、神子はこの人だって言ってるんだよ」

「何かの間違いじゃないの!？」

「神の刻印が、神子を間違うかあ？」

「確かにそうだが……」

ただいま私は、勇者一行に囲まれております。今回の勇者はここに訪れるまで仲間を見つけ、1人旅ではなく数人で私の居る村を訪れました。勇者（男）、武道家（男）、魔術師（女）、聖騎士（男）、と言った面子です。

訪れた勇者が私を神子だと言い、戸惑う面々。何故なら、神子は通



常女性だから。男である私が、神子に選ばれる訳がない　本来ならば。しかし選ばれてしまった、男神子。きつと、実際の性別ではなく、魂の性別で選ばれてしまったのでしよう。私、日本では女で、この世界で男として転生しましたから。

つと、そんな事を考えている間に、額のバンダナが、バンダナがあああ！！　武道家と聖騎士が私を取り押さえ、魔術師が私のバンダナを外して……ああ、遂に見られてしまいました、額の神子の刻印を……！

「ほ、本当に神子だ……！」

「ほら、俺の言った通りだろ？」

「うつつう……、酷い、もうお嫁にいけない……！」

「嫁につて、あんた男なんだから、嫁になんて最初からいける訳ないじゃないか」

「つてか、もしかして神子つてオネエ系なのか？　だから神子に選ばれたのか？」

オネエ系、の意味がわからず首を傾げる勇者一行の3人と、村の間、しかも男が神子として選ばれた事に驚き、しかし喜んでいいのかわからない村人達の微妙な表情。

はたと、逃げるなら今しかないんじゃないかと私は思い、よよよ、としな垂れて泣いていた体を起こし、勇者一行からダッシュで逃げた。魔王と戦うとか無理！　回復役が居ないけど、回復薬で頑張つて！　心の中でそうエールを送って、私は逃げる。勇者達から逃げる！

「あつ、勇者、逃げたぞ！」

「神子、待ってくれ！俺達と一緒に魔王を倒しに行こう！」

「嫌だ、怖い！！」

「皆、神子（仮）を追いかけろ！」

「待て、神子（仮）！」

（仮）を付けられて神子と呼ばれるなら、いつそ神子と呼ばれない方がよい……！私は神子となった後に得たスキル・ステルスを使って勇者一行から逃げ回り、遂には勇者ではなく母親に『どうぞ不肖の息子ですが是非連れまわしてやって下さい』と差し出され、泣く泣く村を出る事となった。

後、初の男神子として私は有名になったのだが、日本人と元日本人としてつい互いにしかわからないネタをやってしまい、『今代の勇者と男神子は男色家で相思相愛だった』と言う伝説を後世に残してしまった事など、私も勇者も知る由もなかった。

## 神が選んだ娘（後書き）

魂が娘だったので、神子に選ばれてしまった主人公（しかし体は男）  
ネタはきつと「うほっ…いい男」「やらないか？」「そんな装備で  
大丈夫か？」「大丈夫だ、問題ない」とかやってたんだと思います。  
ちなみにBLではなく、勇者と主人公は友情を築くのですが……回  
りのお姉様方にはそんなの関係ねえ、なのです。

裏話としては、勇者と神子は同級生で同じクラス。しかし中学入学  
前に入院し、1度も中学に通う事なく神子は死んでいたのです、面識  
はありません（年齢が同じ位なのは、時間の流れが違っつて事で）  
後に勇者は勇者で相手を見つけ日本に戻らず結婚、神子は魔術師の  
子と色々あつて結婚……したのにも関わらず、男色家にされちゃっ  
たと言う……（笑）

死亡のち転生により人形でしょう（前書き）

「投稿日」 2011・11/12

「再掲載」 2011・11/19

「設定」 転生した先で、変態魔術師レイスに溺愛される話。

## 死亡のち転生により人形でしょう

「愛しているよ、私のオリヴィエ」

うっとりとした表情で、私の手を掴んで甲に口付ける。10人が見れば『格好良い』と、100人が見れば『素敵』と、1000人でやっと1人程度が『いけ好かない』と言うだろう顔を持つ男・レイスは、国でも有名な魔術師である。

赤褐色の髪に、それよりも明るい色の瞳を持っていて、身長も高く私が嘗て生きていた日本に居たなら？お買い得物件？と言った所だろう。三高をバツチリ兼ね備えているのだから。

しかし、どんなに三高を持っていたとしても、イケメンだとしても、当の本人が変態ならば、女性も男性も近寄らないものである。近寄るとしたら同類のみだ。

『ねえ、レイス。その？愛しているよ？って止めませんか？』

「何故だ？ 私はオリヴィエを、心の底から世界中の誰よりも愛している」

『傍から見たら、人形に愛を注ぐ変態にしか見えませんかね…』

…？』

別に構わないさ、と微笑み、唇を手の甲から肘へと滑らせて行く。温もり一つない肌を。そう、私は元日本人で、転生して人形となった。自動戦闘人形、それが私を呼ぶ正式名称である。魔術師であるレイスを守る為の人形だ。

元々は、自動戦闘人形に感情などない。作られた人形に魔術師が魔力を込めて、自分の代わりに戦わせる物だから。しかし何の因果か私は人形の中に入り、レイスの為に剣を振るう。黒のゴシックドレスを揺らしながら。

一見すると自動戦闘人形は、人間と変わらない容姿を持つ。私の場合、ミルクティー色の髪に緑の瞳、唇は薄い桃色。人形なので顔のパーツはシンメトリー、見事に美しい顔立ちをしているが、左頬骨の所に製作ナンバーが入っている。人形になって唯一感激したのは、元の自分と全く違う美しい顔立ちになった事だ。

自動戦闘人形の強さは、魔術師の魔力の強さによる。レイスの場合、有名な魔術師と言ったが、はっきり言って実力はこの世界のトップクラスなので、私も結構強い。3m近い鬼族を傘で倒した時には、ぶっちゃけ自分の強さに引いた。

さて、そのトップクラスの魔術師であるレイスだが、最初に私と出会った時……と言うか、まだただの人形だった私に魔力を込めた時には、こんな人ではなかった。本当に、そこら辺に転がっている石を見るような、折れたエンピツの芯を見るような、そんな目で自分を見下ろしていた。

だけど死んだ筈の私が生きていて、しかも見ず知らずの美形男子が目の前に居て、一体何が起きてるかわからず混乱した時、感情を何

も映さなかった目に変化があり、それから自動戦闘人形と魔術師として共に暮らすようになってからは、もっと変化して行った。

1日1食、何も食べない日すらあった彼に食事を作るようになり、魔術師らしい本が乱雑に置かれた部屋を彼の許可を取って掃除し、伸ばし放題だった髪を整えて長さのある程度切ったりして、彼の為に来る事を行った。彼が居てこそ自分だし、どんな形であれ決して長いとは言えなかった生を、別の形で続けさせてくれたのはイスだから。

だけど、どうもそれが彼への最大の変化を齎す原因だったようで。最初は自動戦闘人形？らしく？ない自分を不思議そうに、面白そうに見ていたのだけど、いつからかそこに、別の熱が加わったのだ。

隙あらば抱きついて来るし、出かける時には常に手を繋いでいるし、一緒に寝るようになって、こうして私に『愛している』と言うようになった。正直、元人間であるとは言え、人形である私がどうすればいいのかわからない。

『レイス、ちょ、何故脱がしに掛かってるんですか！』

「着替えさせようと思って。ああ、照れる事はないさ。オリヴィエを買った時に、舐めるように全身くまなく見ているから」

『着替えは自分で出来ます！　っつか、変態な発言止めて下さい！  
大体、最初に会った時は、石ころ見てるみたいな目をしていたじゃないですか！』

「あの頃の私は愚かだったんだ。さあ、後は下着だけだ」

『早っ！？　脱がすの早っ！！』

いつの間にか、下着だけの状態にまで脱がされてしまっていた私。ゴシックドレスの下は、白のベビードール。完全に趣味に走っているレイスは、時折際どい下着を買って来るけど、人形だからこそ着る事が出来る物ばかり。

最近、自動戦闘人形の服や下着が充実し始めているって（自動戦闘人形仲間に）聞いたけど、恐らくレイスが私を愛で始めた故の影響だろう。一部では魔術師の人形遊びと陰口を叩かれているが、実際間違っではない……と思う。

「ほら、今日の下着は可愛いだらう？ 君の肌によく似合う色だ」

『純黒ですよね』

「幼い顔立ちなのに、大人の黒を纏った女性は、男のツボだらう？」

『男のツボってか、レイスのツボですよね……って、あああ、何故下から脱がす！』

「安心しなさい、オリヴィエ。現在製作者の人と話し合って、女性の体に近いパーツを作らせているから。いずれ、このツルンとした部分も女性に」

『生々しいわ！！』

「その研究の為に、娼館に通う資金を製作者に……」  
『止めてー！ もう止めてー！！』

元日本人、現在自動戦闘人形・オリヴィエ。その内、ラブドール機能も付けられそうで、戦々恐々。もし付けられた日には、レイスの元を離れてはぐれ自動戦闘人形としてやっていこうと思っている事だけは、間違いないと思う……。





死亡のち転生により人形でしょう（後書き）

ラブドール……便利な言葉が出来たんですねえ……。

## オリヴィエとの出会い

自分の自動戦闘人形を作れ、と国王直々に命令された。自動戦闘人形とは、魔術師を守る為の道具。魔術師の盾となり、詠唱時間を稼ぐ為の物。人付き合いを苦手とする魔術師を守る為に、国家間の緊張がまだ無い時、それぞれの国が金を出し合って作った、知能のある人形。

しかし知能があっても感情が伴わないならば、そこら辺に居る犬や猫、魔物以下の物。転がっている石と同様に、ただの物質でしかない。なんせ、知能は戦う為、主である魔術師が動きやすい為だけにあるものだから、これ程詰まらない物などない。

今回自動戦闘人形を作るのも、王直々に命じられたからだ。王の命令に背けば反逆となる。この国で私が好き勝手に暮らせるのは、王の恩情故の事。他の国では魔術師は絶対的に国に仕える事になっているが、この国では魔術師を自由にさせてくれる。故に、この国に留まる魔術師は多い。

そんな人柄故に、王を慕って自主的に軍に入る者も居るが、他の魔術師もこの国の大事となった場合には、国の為、王の為に戦うのだろう。私はどうかはわからないが、きつと、恐らく、平穩を壊した馬鹿者共に制裁を与える為、力を貸す……等。

それ故かどうかはわからないが、王に命令されて自動戦闘人形制作

許可証を貰い、城の裏手にある薄汚れた屋敷へ向かう。自動戦闘人形を作れる人形師は数々居るが、私が目指す屋敷の者は変わっていた。

昔、普通の人形を作る人形師だったのだが、如何に人形を人に近づけるかを極めていたら、いつの間にか自動戦闘人形を作っていたと言う。確かに自動戦闘人形は人間に近い姿をしているので、結果的にそこに落ち着いても間違いいではない。

元々酒場で知り合った男で、人形への入れ込みように掛けては特別を通り越して特殊だった。他の人形師は？丈夫で中々壊れない人形？を作るのに対し、彼は？人間よりも人間らしい人形？を作る事を目標としていたのだから。

何かを一途にやり遂げる男の性格を気に入り、折角なので男の作った人形を買う事に決めたのだが、やはり物は物。辿り着いた屋敷、訪れた私に驚くもどこか納得した表情を見せ、案内された部屋で人形の元となるパーツを選べと言われて適当に組み合わせて行く。

体の基本的なパーツは皆同じだが、違うのは顔や髪。自分の好みに仕立て上げる事が出来るのだ。ミルクティーのような髪を掴み、目は緑色の物を選ぶ。唇の色は薄い桃色。選んだパーツを、土台となる顔に嵌めて、第一段階終了。

パーツを組み合わせたら、次に行くのは魔力を人形に注ぐ事。魔方陣を描いた中に人形を入れ、魔術師の魔力を込めてただの人形から？自動戦闘人形？を作り出す。魔方陣によって、人形は人の姿に近い物となるのだ。魔力はパーツを繋ぐ、筋肉のような物。

魔方陣の上に人形の元を置き、作る分に必要なだけの魔力をこめる

と、バラバラだった頭と胴体、四肢が繋ぎ合わされ、やがて人形の形となった。正直、コレが四六時中傍に居ると考えると、ぞつとする。

むくりと起き上がった人形は、殆ど人間と変わらぬ姿をしている。

しかし頬には、自動戦闘人形番号が刻まれていて、直ぐに人形だとわかるのだ。人形は起き上がった後、暫くそのまま動かずに居た。

それを妙に思ったのは、人形師の男である。あれ、どうしたんだ？

と声を掛けつつ人形を覗き込むと、人形の視線は人形師の男へと向けられ、それから私を見た。そして戸惑いと混乱の表情を作り出す。これが、人形……？

『え、え？ な、何、ここ……！？』

「ああ、故障じゃないのか。さあ、立って挨拶なさい。彼がお前のご主人様だ」

『故障……ご主人様……つて、つ、ぎゃあああああ！ 素っ裸！？』

己が裸であった事に混乱し、悲鳴を上げる人形。人形師は一体なんなんだ、人形らしくもない、と初めて目の当たりにする出来事に混乱しつつ、体を必死に隠す人形の為に適当な布を探し、彼女の前に放り投げた。

人形は布を纏うと、少しでも自分の状況を判断する為かきよるきよると辺りを見回し、最後にはどこか納得いったような顔で頷く。そして、私の前に膝を突いた。

『お、お作り下さり、有難う御座います。どうぞ、私めに名前をお授け下さい』

納得はしたものの、まだ混乱しているのだろう。声も体も震えている人形。人形師の男を見ると、彼もまた首を傾げている。やはりこの人形は、普通の人形ではないようだ。……面白い、ただの道具だと思っていた自動戦闘人形だが、楽しませてくれそうだ。

「オリヴィエ。お前の名前はオリヴィエだ」

『オリヴィエ……』

「そして、私の名はレイス。わかっているだろうが、魔術師をしている。以後、私の為に動け、オリヴィエ」

手を差し伸べると、オリヴィエの名を貰った人形はおずおずとその手を取り、ゆっくりと立ち上がると、私の顔を見て泣きそうな表情になりながらも、薄く微笑んだ。

この日より、私、魔術師・レイスと自動戦闘人形・オリヴィエは共に過ごす事になるが、まさか私が初めて愛する人が、この自動戦闘人形だとは、夢にも思わない事であった。

## オリヴィエとの出会い（後書き）

オリヴィエには変態的な愛を捧ぐレイスは、クールなイケメン魔術師として巷の奥様達から人気です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5363y/>

---

短編集

2011年11月26日01時48分発行